動 向

# オランダ・ライデンで開催された国際会議「北メソポタミアの後期新石器時代を読み解く」

小髙 敬寛

A Note on the International Conference, “Interpreting the Late Neolithic of Upper Mesopotamia”

Takahiro ODAKA

キーワード：国際会議、北メソポタミア、後期新石器時代、8.2ka イベント、ハラフ文化

Key-words: international conference, upper Mesopotamia, the late Neolithic, 8.2ka event, Halaf culture

## はじめに

国際会議「北メソポタミアの後期新石器時代を読み解く（Interpreting the Late Neolithic of Upper Mesopotamia）」は、当初からの企画者であったオランダ・ライデン大学（Leiden University）の P. M. M. G. アッカーマンス（Akkermans）氏、O. ニュウェンハイス（Nieuwenhuyse）氏、米国ビンガムトン大学（Binghamton University）の R. ベルンベック（Bernbeck）氏に、ライデン大学の A. ラッセル（Russell）氏を加えた四氏のオーガナイズによって、2009 年 3 月 26 日から 28 日の 3 日間、オランダ王国ライデン市で開催された。後期新石器時代に先立つ先土器新石器時代、そして後続する銅石器時代あるいはウバイド期を主たる対象とした国際会議は、これまでにも幾度となく催されてきた（e.g. Healey 2008; 小泉 2008）。しかし、その狭間にある後期新石器時代については、近年の急速な資料蓄積にもかかわらず、焦点を当てられることが少なかった。今回の国際会議はその空白を埋めるべく計画されたようで、筆者が開催の予定を初めて知ったのは、企画者の一人であるニュウェンハイス氏からの電子メイルが届いた 2008 年 1 月のことであった。この電子メイルは、会議の概要を周知するとともに会議での研究発表を促したものであり、多数の研究者に宛てて送信されていた。その文面によれば、対象とする時代を前 7 千年紀から前 6 千年紀、地理的範囲を北レヴァント、北シリア、南東アナトリア、北イラクの各地域とし、テーマにはセトルメント・パターン（settlement patterns）、集落の構造と変遷（village layout and biography）、儀礼（ritual）、編年の諸問題（problems of chronology）、地域史観（regional perspectives）、経済と環境（economic and ecological issues）、移動と交換（mobility and exchange）、物質文化の構成と意味（constitution and meanings of material culture）の 8 つを掲げている。また、ほぼ同時に公式ウェブサイト（http://www.interpretingthelateneolithic.nl.）が立ち上がり、*Neo-lithics* 誌上（1/08）でも告知文が掲載されるなど、一般に向けた広報もなされた。

口頭およびポスターによる研究発表の応募締め切りは 2008 年 3 月 15 日、発表題目と要旨の提出期限は同年 7 月 1 日であったが、さらに半年以上の準備期間を経て、2009 年 3 月の本番を迎えることとなった。最終的なプログラムに組み込まれた研究発表の数は、口頭発表が 43 本、ポスター発表が 25 本に上った（図 1）。本学会からは、常木晃、三宅裕、前田修、門脇誠二の各氏と筆者が口頭発表者として、西秋良宏氏と門脇氏がポスター共同発表者として名を連ねた。個人的には当初の想像よりも遙かに大規模な会議となった印象を受けたが、それは主催者側も同じだったのであろうか、プログラムのうち特に口頭発表は 13 ものテーマに細かく分類し直されていた。

開催地のライデンはオランダの空の玄関口であるスキポール国際空港に程近く、電車に乗ってわずか 20 分前後という距離にある。17 世紀にはオランダ第二の都市として栄華を極めたこの町のかつての面影は、堀に囲まれた旧市街に今なお色濃く残っており、そのなかに会場となったライデン大学の諸施設が散在している。ライデン大学は 1575 年創立というオランダ最古の総合大学であり、独立した学部として考古学部が設置されている点は特筆に価するだろう。会議の運営にはその学生らしき大勢のスタッフが従事していた。会議の参加者はおおよそ 100 名程度であり、主催者側が意識的に自由な会話の機会を多く設けたことも手伝って、1 ～ 2 時間ごとに挟まれる休憩時間や長めの昼食時間、開催前日から 1 日目、2 日目と続いた夜の懇親会などでは、参加者の間で活発な議論や情報交換がなされた。なお、1 日目の懇親会は大学に近い国立古代博物館（National Museum of Antiquities）で催されたが、3 日目の昼食後には会議参加者が同館の展示を無料で閲覧できる

*西アジア考古学　第 11 号　2010 年　149-154 頁*
© 日本西アジア考古学会

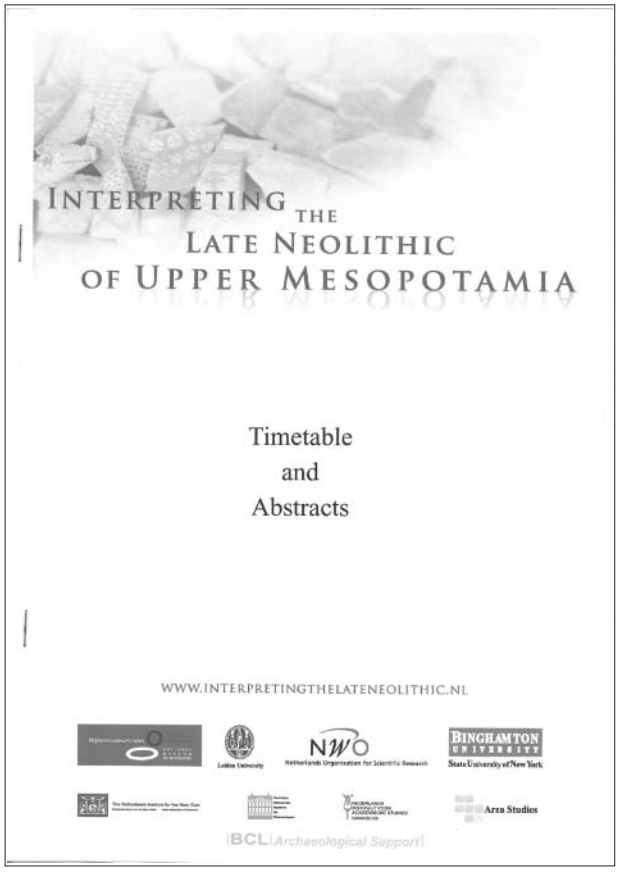


図1　出席者に配付された予稿集

という計らいもあった。

会議の概要

1日目（2009年3月26日）

1日目および2日目の会場は、1616年に建てられたというライデン大学本部（The Academiegebouw）であった（図2）。会議はまず、ニュウェンハイス氏とアッカーマンス氏による開催挨拶で幕を開けた。ここでは、先述のように先土器新石器時代と銅石器時代、すなわち新石器化の時代と都市化の時代に挟まれた後期新石器時代はこれまで国際的に議論する機会に恵まれなかったこと、しかしながら、両者をつなぐこの時代の解明は先史文化の変遷を通時的に捉えるうえできわめて重要であること、そして、昨今の調査研究の進展が議論を深めるのに十分な土台を提供していることなど、本会議を開催する意義が改めて示された。

続いて、「革新の役割（The Role of Innovation）」というテーマから研究発表が始まった。このテーマでの発表は4本で、うち3本はハラフ土器を対象にしたものであった。B. ロバート（Robert）氏は、土器が特定の文化の示標にとどまらず、さまざまな人間集団の生活様式を探るための有力な資料となりうることを強調し、ハラフ文化の土器製作についてとりわけ技術的観点からの考察を行なった。F.

図2　1・2日目の会場となったライデン大学本部

ホール（Hole）氏は、ハラフ土器が諸属性の組み合わせによって認識される一方で、細かな面では多様性を内包する点を指摘した。実際にシリア北東部のウンム・クセイール（Umm Qseir）遺跡出土資料を中心とした彩文の分析結果を示し、精細な編年的位置や地域間関係の措定における問題点を論じた。J.–D. フォレス（Forest）氏は、ハラフ土器の成立過程においてあらゆる点でみられる均質化や精良化が、地域的な潮流としてハラフという新たな文化の誕生に直結したとする。このセッションで唯一ハラフ土器を対象としなかったK. ドゥイステラマート（Duisteramaat）氏は、代わりに印章と封泥の利用について、以前シリア北部のテル・サビ・アビヤド（Tell Sabi Abyad）遺跡の事例から得られた知見と、近年新たに増加した資料との整合性を論じた。

次のテーマ「儀礼・死・超自然（Ritual, Death and the Supernatural）」では、2本の発表があった。Y. エルダル（Erdal）氏は、南東アナトリアのハケミ・ウセ（Hakemi Use）遺跡から出土した埋葬人骨の形質人類学的所見を述べ、特に意図的な頭蓋変形について詳しく報告した。常木晃氏は、シリア北西部のテル・エル＝ケルク（Tell el-Kerkh）遺跡で発見された最古級の共同墓地を紹介し、墓地の形成や火葬をはじめとした葬送慣習の変化の背景について考察した。

昼食を挟み、午後は「集落の変遷（Village Biographies）」というテーマで始まった。4本の発表は、いずれも最近の発掘調査結果の速報であった。K. バートル（Bartl）氏からはまとまった調査事例の乏しかったシリア西部に所在するシール（Shir）遺跡、M. モリス（Molist）氏らからはシリア、ユーフラテス河中流域で継続的に調査が行なわれているテル・ハルーラ（Tell Halula）遺跡について報告があった。どちらも当該地域における後期新石器時代の基準資料といえる。J. ベッカー（Becker）氏が報告したテ

ル・タウィラ（Tell Tawila）とテル・ハラフ（Tell Halaf）、W. クルエル （Cruells）氏が報告したテル・チャガル・バザル（Tell Chagar Bazar）は、いずれもシリア北部から北東部に所在する遺跡であり、ハラフ文化編年の精細化への寄与が見込まれる。

四つ目のテーマは「地域の概観（Regional Overview）」であり、3本の発表があった。P. M. M. G. アッカーマンス氏は、テル・サビ・アビヤド遺跡における長年の調査成果と精細な放射性炭素年代による編年から、前7千年紀末の環境変動（いわゆる8.2kaイベント）に伴って文化的にも重大な変化が起きていることを指摘した。なお、8.2kaイベントに伴う文化変化は、以後の会議を通じてテル・サビ・アビヤド遺跡の調査関係者を中心にたびたび強調されることになる。M. オズドアン（Özdogăn）氏はトルコ南東部における新石器化の地域性と拡大について、近年の多くの調査事例をもとに概括した。S. キャンベル（Campbell）氏は、ハラフ期における社会の統合性について、トルコ南東部の巨大集落であるドムズテペ（Domuztepe）遺跡とイラク北部の小集落テル・アルパチヤ（Tell Arpachiyah）遺跡を例にあげつつ論じた。

初日最後のセッションは、「外部からの視点（A View from the Outside）」のテーマで3本の発表が組まれた。B. デュリング（During）、S. ハンセン（Hansen）、K. ギブス（Gibbs）の三氏より、それぞれ中央アナトリア、南コーカサス、南レヴァントの各地域における前7千年紀から前6千年紀の状況について説明があり、北メソポタミアとの比較が試みられた。

### 2日目（2009年3月27日）

次の日の研究発表は「身体と世界観（Bodies and Worldviews）」というテーマから始まった。S. キルト＝コステロ（Kielt-Costello）氏は、土器の文様などの図像表現から当時の儀礼活動に迫った。K. クラウチャー（Croucher）氏は、当時の葬送活動や人体表現の諸例を検討し、身体とアイデンティティとの関係性について考察した。E. ベルチャー（Belcher）氏は、ハラフ文化の土偶などにみられる分解された身体の表現に着目し、その流行の広がりを検討した。

続いてのテーマは「環境と経済（Ecology and Economy）」で、3本の発表があった。A. ラッセル氏とL. アストリック（Astruc）氏は、テル・アビ・アビヤド遺跡出土の動物骨と石器を分析し、8.2kaイベントに際して狩猟活動が減退し、動物資源の開発戦略は乳利用等に移っていくさまを明らかにした。A. エリム＝オズドアン（Erim-Özdogăn）氏の発表は、2007年に発掘を行なった南東アナトリアのスマキ・ホユック（Sumaki Höyük）遺跡の調査報告であった。N. バデル（Bader）氏とM. ルミエール（Le Mière）氏は、かつてソヴィエト隊が精力的に調査したシンジャール地域の諸資料について、とりわけ先土器新石器時代から土器新石器時代への移行という観点から、近年の新たな資料との比較を行なった。

ポスター発表のコアタイム（後述）と昼食を挟んで、午後は「ミッシング・リンク（Missing Links）」というテーマで口頭発表が再開された。M. モットラム（Mottram）氏は、いわゆる「原ハラフ（Proto-Halaf）」段階において、すでにハラフ文化の母胎となる地域的な伝統が形成されていたことを主張した。H. テキン（Tekin）氏からは、南東アナトリアにおいて初めてみつかったハッスーナ／サマッラ文化の遺跡である、ハケミ・ウセの発掘成果について概要の報告があった。G. コズベ（Kozbe）氏らは、2004～2006年に実施された南東アナトリア、シュルナク地域の踏査成果について述べ、後期新石器時代の11遺跡から採集された土器資料をもとに北メソポタミアとの類縁性を強調した。

2日目の最後のテーマは「意味とマテリアリティ（Meanings and Materiality）」で、3本の発表が用意された。E. ヒーリー（Healey）氏はおもにドムズテペ遺跡の資料をあげながら、石器石材という印象の強い黒曜石が貴石や鏡、器の素材としても用いられた特別な財であったことを示し、その価値を生成した社会経済的・文化的な脈絡を探った。前田修氏は、テル・エル＝ケルク、アカルチャイ・テペ（Akarçay Tepe）、サラット・ジャーミー・ヤヌ（Salat Cami Yanı）の3遺跡で出土した黒曜石の分析から、石材の産地と利用法に相関関係があることを見出し、これを集団間の社会的関係の構築・維持と結びつけて論じた。G. カストロ＝ゲスナー（Castro-Gessner）氏は、フストゥクル・ホユック（Fıstıklı Höyük）遺跡とテル・サビ・アビヤド遺跡から出土したハラフ前期の彩文土器を例にとり、文様が類似しても施文方法は必ずしも一致しない点を指摘し、考古学的な文化・伝統を識別するためには、遺物の外見的類似だけでなくそれをめぐる行動が重要であると主張した。

この日は研究発表の後、さらに公開総合討論（Open collective discussion）が行なわれ、主として考古学的な文化あるいはエンティティの概念をめぐり、その定義や意義について話し合われた。この場で問題を解決しようというスタンスではなく、参加者が各自の意見を自由に表明しあう形で討論は進められたが、筆者にとって興味深かったのは「原ハッスーナ（Proto-Hasssuna）」という呼称が生み出された経緯についての発言である。当時から原ハッスーナ文化の遺跡調査に携わってこられたN. バデル氏によれば、そもそもこの言葉は一定の明確な考古学的アセンブレ

ッジに対して与えられたものでなく、新資料の頻出によって混乱した状況を整理するために、あくまで便宜的に用いられ始めたものであるという。それから半世紀近くが経過した現在、「先ハラフ（Pre-Halaf）」「原ハラフ」あるいは「プレ・プロト・ハッスーナ（Pre-Proto-Hassuna）」といった、「原」や「先」を付す呼称が次々と生まれ、便宜的であったはずの用語をさらに整理しなければならない状態になりつつある。学史的な脈絡の重要性を改めて感じさせられたのと同時に、氏の示した現状に対する憂慮が印象的であった。

### ポスター発表

2 日目にはポスター発表も同時に行なわれ、先述のように昼食前にはコアタイムが設けられた。25 本もの発表があったため個々の概述は避けるが、うち 6 枚がテル・サビ・アビヤド遺跡、5 枚がドムズテペ遺跡に関連する研究成果で占められていた。また、本学会会員の西秋良宏氏と門脇誠二氏からは、シリア北東部のテル・セクル・アル＝アヘイマル（Tell Seker al-Ahemiar）遺跡でみつかった先土器新石器時代 B 期の井戸址に関する報告があった。

### 3 日目（2009 年 3 月 28 日）

最終日は会場をリプシウス棟（The Lipsius Building）に移して（図 3）、「地域的な伝統とつながり（Regional Traditions and Connections）」というテーマから発表が始まった。三宅裕氏は、南東アナトリアのサラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡や北レヴァントのルージュ盆地などの調査成果から、北メソポタミアと北レヴァントにおけるそれぞれの強固な地域性の存在を述べた。筆者の発表は、ルージュ盆地最古の土器であるケルク土器が、北レヴァントに特有な暗色磨研土器の祖型であると同時に、シリア北部からトルコ南東部にかけてみられる最古級の土器群の一種としても位置づけられることを示し、これらの土器がアセンブレッジ上の脈絡を時空間的に違えていく点から提起される問題について論じたものであった。J. オーツ（Oates）氏は 1960 年代に手がけたチョガ・マミ（Choga Mami）遺跡の調査にまで遡り、サマッラ文化をめぐる諸問題について学史的な見地から整理した。M. ルミエール氏は、北メソポタミアにおける最古の土器群について近年得られた情報を総括し、その地域性や系譜について考察した。

続くテーマは「技術的実践（Technological Practices）」で、3 本の発表があった。門脇誠二氏は、テル・セクル・アル＝アヘイマル遺跡における黒曜石の石刃製作技術の分析から、製作に係る行動を復元し社会的な脈絡について検討した。S. アミロフ（Amirov）氏は、イラク北部のヤリム・テペ（Yarim Tepe）Ⅱ遺跡から出土したハラフ期の

図 3　3 日目の会場となったリプシウス棟

土器を対象とした、詳細な器形の分析に基づく編年研究の成果を述べた。M. グレギロワ（Gregerová）氏らの研究グループは、シリア北東部のテル・アルビッド・アビヤド（Tell Arbid Abyad）遺跡から出土した土器の岩石学的・化学的な分析結果を報告し、土器製作技術に対する自然環境の影響について言及した。

昼食休憩後は、「共同体の形成（Formation of Communities）」というテーマで発表が再開した。4 本の発表のうち 3 本は南東アナトリアのハラフ文化遺跡、フストゥクル・ホユックに関連したものであった。M. T. スターツマン（Starzmann）氏は、同遺跡の石器製作における動作連鎖（chaînes opératoires）の研究を通じて、先史時代の「実践共同体（communities of practice）」の形成を考察した。M. ホプウッド（Hopwood）氏は、出土土器の付着物や使用痕からその利用状況の変化、ひいては調理方法の変化を探り、遺跡の変遷との関係を検討した。R. ベルンベック氏は、フストゥクル・ホユックをはじめとする小規模かつ短期間で放棄された遺跡について、テル・サビ・アビヤドのような大規模な遺跡と対比しつつ分析した。ハラフ文化の西半はつねに変化し続ける小さな共同体のネットワークに支えられた社会であり、共同体どうしは明瞭な境界を持たなかったというのが氏の主張であった。一方、R. オズバル（Özbal）氏はハラフ文化の中心地から離れた同時期の遺跡、テル・クルドゥ（Tell Kurdu）をとりあげ、周縁地域の住民による土器をはじめとしたハラフ文化の諸要素の扱われ方を精査した。

3 日目を締めくくるテーマは、「社会のアイデンティティと変化（Social Identities and Change）」であった。4 本の発表が予定されていたが、G. スタイン（Stein）氏の発表は欠席のためキャンセルされた。残る 3 本はいずれも、ハラフ文化を主対象として論じたものであった。O. ニュウェンハイス氏は、前 6200 年頃に始まる「彩文土器革命」

によって土器は威信的な媒体となったが、当時の重層的な社会経済変化をみるかぎりその製作技術は一部の者によって統制されることがなかったため、彩文土器の拡散や模倣が繰り返され、ハラフ土器の誕生にもつながったという見通しを述べた。S. ポロック（Pollock）氏は、考古学的な文化や伝統の同定に旧来よりも明快な分析や解釈の方法を適用すべきであると主張し、ハラフ文化を例にとって、社会的脈絡や伝統の理解に対する生産と消費の観点からみた空間利用分析の有効性を説いた。最後の発表者を務めたM. フランジパネ（Frangipane）氏は、ハラフ文化にみられる有形無形のモノが広範に移動した様について検討し、これを人間集団間における関係性の樹立・維持のために行なわれた、特別な社会的・政治的な交流の結果であるとの見解を提示した。

研究発表終了後、オーガナイザーを代表してベルンベック氏が会議の総括を述べた。さらに、会場からはそれに対する二、三のコメントが披露され、3日間にわたる会議は幕を閉じた。

## 寸評

以上、ほぼ時系列に沿って会議の概要を述べてきた。口頭・ポスターあわせて70本近くの発表を一つの会場で進行したこともあり、会議は連日8時30分に始まって18時過ぎまで延々と続いた。その充実ぶりには目を見張るものがあるが、いっぽうで発表の内容は事実上、時代と地域さえ大まかに合致していれば自由であったため、研究の対象や目的はきわめて多岐にわたった。結果として、会議全体における議論の焦点がいささか曖昧になってしまったきらいがある。当初のテーマは8つに絞られていたにもかかわらず、最終的に13ものテーマに組み替えられたのも、オーガザイザーが発表内容の多様性に対処したためであろう。正直なところ、各テーマは予稿を参照してから後付けされたように感じられ、それぞれに配された2～4本の数少ない発表でさえ、必ずしもすべてがテーマに沿った内容とはいえなかった。したがって、議論の主題としてはあまり機能しなかったのではなかろうか。

しかし、これだけ多様な発表希望が数多く殺到したという事実は、やはり後期新石器時代の研究者たちが日ごろの成果を報告し、互いに議論する機会を強く待ち望んでいた証拠でもある。その機会の提供は所期の目的に謳われていたところであり、この分野においてこれほど多くの研究者が一堂に会したのは、おそらく初めてのことであったという点をまずもって評価すべきであろう。学界にとっては新たな展開であり、今後のさらなる発展の端緒になるかもしれない。

そのための糸口となる示唆が得られた点もまた、会議の大きな成果であった。個人的に印象深かったのは、各遺跡の調査において調査組織全体の意思統一が強く図られ、各人の研究発表でもそれぞれの資料を同じ着想から解釈するという傾向がみられたことである。たとえば、主催者の多くが関わるテル・サビ・アビヤド遺跡の調査団は、8.2kaイベントに伴う物質文化の変化を精細な放射線炭素年代によって裏付けながら克明に追跡し、先史時代の社会・経済的な動態における一つの画期として位置づけようとする研究の方向性を明確に打ち出していた。おそらく、個々人が研究に着手してから成果を持ち寄るまでの過程において、調査団内で繰り返し議論が重ねられた結果なのだろう。会議を通じ、各遺跡のアイデアが調査組織の枠組みを超えて交換され、相互に検証しあえる可能性が生まれたことで、学界全体を巻き込む議論の焦点が新たに準備されたといえる。

なお、本会議の終了後まもなく研究発表集の制作についてアナウンスがあり、現在オーガナイザーを務めた諸氏によって編集作業が進められている。次なる展開への指針とするためにも、会議開催時の熱が冷めぬうちにその内容は記録され、広く公開されるべきであろう。2010年末までの刊行を目指すと聞いているが、実際その通りになることを期待したい。

## おわりに

本会議で発表を行なった本学会会員は、いずれも東京大学や筑波大学が編成する調査団に属し、シリアもしくはトルコにおける後期新石器時代の遺跡調査に長年従事している。戦後まもなく東京大学の調査団が西アジアに初めて派遣された折、発掘に着手したのがイランやイラクにおける後期新石器時代の遺跡であり、その後も長きにわたってこの時代の遺跡調査に携わってきたという学史的な背景を鑑みると、我が国の西アジア考古学界が本会議の対象とされた分野に寄与できる部分はきわめて大きく、それに対する海外研究者からの期待も強く感じられる。興味深い会議の企画と円滑な運営に対してのみならず、わずかながらではあるが我われの責務を果たす機会を与えていただいたことについても、ご尽力くださった主催者ならびにライデン大学、国立古代博物館の関係各位には、深く御礼申し上げなければならない。欧米において次の機会を設けていただけるのであれば、引き続き積極的に参加し、研究成果の公表に努めるべきだろう。さらにいえば、西アジアあるいは欧米各国との物理的な距離という障壁は無視しえないものの、今後は同類の催しを主体的に企画し、国外に向けて情報を発信する場を自らの手で設けることが求められるのかもしれない。その点、2005年7月に東京大学で開催された国際シンポジウム「北メソポタミア・ハブール川流域の

新石器時代考古学とその周辺（Neolithic Archaeology in the Khabur Valley, Upper Mesopotamia and Beyond)」(cf. Verhoeven 2006）に続き、小規模ながらも 2009 年 10 月に国際シンポジウム「西アジアにおける土器の誕生－パイロテクノロジーの起源を探る－（The Emergence of Pottery in West Asia: Search for the Origin of Pyrotechnology)」が筑波大学で催されたのは、たいへん意義深いことであった。催しを企図できる立場にない筆者が申し上げるのは甚だ恐縮ではあるが、今後も継続してこのような場が設けられることを期待したい。

なお、万が一発表内容等の記述に不備や誤りがあった場合は、筆者の理解不足に帰せられることを念のため記しておく。

**参考文献**

Healey, E. 2008 6th Conference on PPN Chipped and Ground Stone Industries of the Fertile Crescent: STEPS (Studies in Technology, Environment, Production and Society). *Neo-lithics* 1/08: 40-42.

Verhoeven, M. 2006 The Near East in the Far East –Tokyo Symposium. *Neo-lithics* 1/06: 37-40.

小泉龍人　2008「ウバイド期に関する国際研究集会」『西アジア考古学』9 号　165-169 頁。

*小髙 敬寛*
*東京芸術大学大学院美術研究科*
*Takahiro ODAKA*
*Graduate School of Fine Arts, Tokyo University of the Arts*